

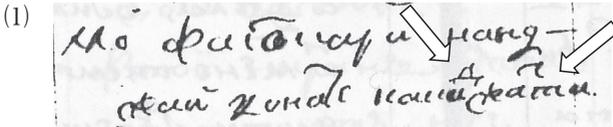
(研究ノート)

## ロシア資料の上付文字についての覚書

久保 蘭 愛

### 1. はじめに

一般に文字は縦書き・横書きにかかわらず一行内に収めて書かれるのが普通であろうと思われるが、本稿で扱うロシア資料には、以下のように文字を行の上部に書き付けている例がまとまって見られる。



Мо      фаюкара                      нанд-  
жай      конате    кака\д/жа\т/та. 【10章】

(1)の例では「`кака\д/жа\т/та` (`kaka\d/za\t/ta`: 書かちゃった)」という文字列の `д` (=d) と `т` (=t) の子音が行の上にはみ出して書かれている。行の上部に書かれるこの文字を、便宜的に上付文字と呼んでおこう。

この表記法はいったいどのような規則によるものであろうか。本稿では、この上付文字が日本語の表記にあたってどのように用いられているのか、何のために存在するのかについて、自分自身の覚書も兼ねて記しておきたい。

### 2. 対象資料

考察にあたって用いる資料について述べておく。本稿で用いるロシア資料は、1729年にロシアに漂着した鹿児島島の少年ゴンザとロシア人 A・ボグダー

ノフによって作成された、ロシア語と日本語の対訳資料群（辞書、文法書、会話集等）である。鹿児島方言を反映する日本語訳部分も含めて、日本語とは異なる音韻体系を反映したキリル文字で書かれており、いわゆる外国資料に含まれる。今回は、ロシア資料のうち、上付文字の多く見られる『友好会話手本集（草稿本）』<sup>1)</sup>を主として用いる（以下、草稿本と呼ぶ）。この資料は、対話や慣用句を集めた会話集である。19の章から成り、ページ左にロシア語文を配し、ゴンザによる日本語（＝鹿児島方言）訳を右に附す体裁を取る。原本は、ロシア科学アカデミーに所蔵されているが、村山七郎氏（九州大学文学部教授（当時））がロシア東洋学研究所から持ち帰ったコピーが九州大学文学部図書館に所蔵されている。本稿の分析では、この九州大学文学部図書館蔵の資料を調査の対象とした。

また、草稿本との比較のため、『友好会話手本集（清書本）』も扱う（以下、清書本と呼ぶ）。この資料は、草稿本の別本となるものである。内容はほぼ草稿本と同じだが、より日本語らしい語順に改める、常体から尊敬表現・丁寧表現に改めるなど、修正の跡が見える。原本は草稿本と同じくロシア科学アカデミーに所蔵されているが、そのマイクロフィルムが鹿児島県立図書館に所蔵されている。本稿の分析にあたり、江口（2009）の翻字・翻訳を参考にしつつ、県立図書館蔵の資料を調査した。

以下、ロシア資料から例を挙げる際はゴンザ訳、（ ）内にラテン文字へ置き換えたものとゴンザ訳を解釈し漢字仮名交じり文にしたもの、の順に挙げる。ラテン文字への置き換えは、村山（1965）の方針を参考にしつつ、以下のように対応させた。

## (2) ラテン文字への置き換え

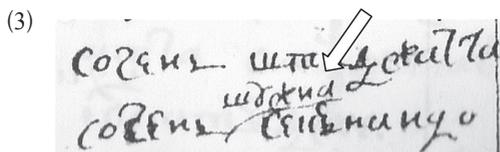
母音 а: a 及び й: i у: u е: e ъ: ̣ о: o я: ja ю: ju  
 ю<sup>2)</sup>: jo

子音 к: k с: s ш: ʃ з: z ж: ʒ т: t ч: tʃ ц: ʦ д: d н: n  
 ф: f в: w б: b п: p м: m р 及び л: r

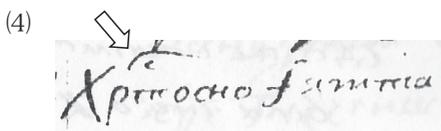
記号 ь（軟音記号）: ' ъ（硬音記号）: ・（半角中黒）

また、対象とする上付文字は、\ /で挟んで示し、例の存する章を【 】内に記載した<sup>3)</sup>。

分析にあたり、補入と見られる弧線を伴った例 (=3)の囲み部分) や、ロシア語をそのまま表記したものに上付文字が見られる例 (=4)の\ /で挟んだ部分) は対象から除外した<sup>4)</sup>。



согень                      штаджатта  
согень ШУЖНА      секънандо 【4章】 (⇒除外)



Хр\с/тосно                      Ятта 【16章】 (⇒除外)

これらを除外して得られた日本語部分の上付文字は、草稿本に530例見られる<sup>5)</sup>。この上付文字は何のために存在するのだろうか。

### 3. 上付文字について

#### 3.1. 補入の可能性とスペース省略の可能性

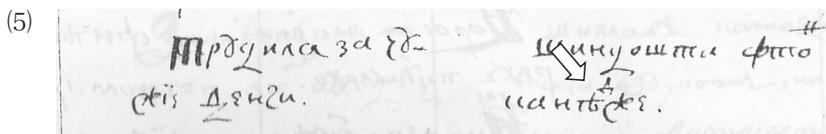
本稿で分析対象とする上付文字は、基本的に子音文字1文字が行上に書き付けられているものである<sup>6)</sup>。単に行の上部に書かれるだけでなく、多くは左右に回転した形で書かれる。どのように上付になるかは、おそらく文字ごとにおおよそ決まっているものと思われる。例えば、キリル文字 p (=r) は左に90°回転、т (=t) は右に90°回転、к (=k) は回転せずにそのまま行の上部に付

されるというように、各文字で書き方がほぼ固定しているためである。

この表記について考える前に、まず確認しておくべきことは、弧線を伴った例(=3)と同じく、単なる補入ではないかという可能性である。資料作成時の書き落としあるいは聞き落としによって、一行に文字を書いた直後あるいは後から書き入れたという可能性もなくはない。しかし、多くの場合、補入とは考えにくい。というのも、別本である清書本にも多くの上付文字が見られるためである。草稿本からの転写時に、語順を改めるなどの修正を加えている清書本において、補入があれば草稿本を修正して一行の中に収めるのが自然なはずである。しかし、清書本には草稿本に比してやや少なめではあるものの、448例の上付文字が見られる。これらの中には、草稿本とまったく同じ箇所が上付になっているだけでなく、草稿本では存在しないにも関わらず、清書本においてのみ上部に文字が付されるという例が多々存する。ここから、上付文字のほとんどは偶発的な補入ではなく、必要があって表記がなされたものと考えられる<sup>7)</sup>。

もう1点考慮しておかねばならないのが、行上部に文字を書き付けることによって行末のスペースを節約するために用いられたという可能性である。例えば、同じく外国語のフィルターを通して日本語を記録したキリシタン資料では、mやnなどの子音文字以外に鼻音を表すチルダ(~)が見られる。これは母音の上に付される記号であるが、千葉(2013)によれば、チルダによる鼻音表記が行末に集中する傾向にあることから、この記号は鼻音を表す機能とともに一行に文字列を収めるという機能をも併せ持っているという。

本資料に見られる上付文字は、行末に書かれるものや、一行が詰めて書かれている箇所にも存するが、当該行に特にスペースを節約する必要のない箇所にもまま見られる。



(左) ロシア語文

Трудился за чужие  
денги.

訳：他人の金で勤労した。

(右) ゴンザ訳

шиндошта фто\н/  
канъ\д/же.

解釈：辛労した 人の 金で

【9章】

(5)の\н/は行末に位置し、スペースを勘案する必要も考えられるが、2行目の\д/は、後ろに十分なスペースがあり、特に省スペースに気を配る必要性もない。このように、特に詰めて表記する必要のないところにも上付文字が見られることから、ロシア資料の上付文字は省スペースを主たる目的とした表記ではなさそうである。

### 3.2. 先行研究

この上付文字について述べた先行論で見当たったものは次の江口（2009）の記述のみである。

- (6) 上に添えてある文字は（中略）すべてがそうではないが「子音文字+Ъ」の「Ъ」を省略することが多い。（江口（2009））

ここでは、上付文字が子音文字の後に付された「Ъ（硬音記号）」の省略であることが多いと述べられている。

ここで示されている硬音記号について少し説明しておきたい。この記号は、本資料の日本語表記において、次の2つの機能を持っているという。

- (7) a ウの音色を、直前の子音に添える機能  
b 後続音との分離機能（江口（2006）による）

(7a) は、「子音文字+ь」の形で用いられ、狭母音の脱落や無声化を表すという。また、(7b) は、「子音文字+ь」の後続音が母音あるいは p (=r) である場合、ьの前の子音と、後続音とが分けて発音されるものであることを示すものである。

さて、上付文字の多くがьの省略であるという先行論 (=6) を承けて、草稿本の上付文字と、清書本の対応する箇所とを比較してみよう。すると、草稿本では上付文字になっている箇所が、確かに清書本で「子音文字+ь」に書き換えられているものが多々存する。

- (8) a 草稿本：фонноко\т/ (fonnoko\t/ : 本のこと = 本当のこと)  
 清書本：фоннокотъ (fonnokot• : 本のこと = 本当のこと) 【2章】
- b 草稿本：шинае\н/юнь (šinae\n/joni : 死なれんように)  
 清書本：шинаенъюнь (šinaen•joni : 死なれんように) 【14章】

(8a) の清書本の ь は語末の母音の脱落を示している。(8b) は、ь がなければ「死なれニョに」と読まれてしまうため、後続の半母音  $\widetilde{ю}$  (=jo) と分けて発音することを示すために ь が存在する。先行研究の指摘通り、ь の代わりに子音文字が上付になっているというわけである。

しかし、他方で氏の述べるように、ь の省略に当てはまらないように見える例も存在する。

- (9) a 草稿本：сои\д/жемъ (soi\d/zem• : それでも)  
 清書本：сойджемъ (soidzem• : それでも) 【5章】
- b 草稿本：тогена\ш/шарна (togena\ʃ/ʃarna : とげなっしゃるな = 咎になしやるな)  
 清書本：тогенашарна (togenaʃʃarna : とげなっしゃるな = 咎になしやるな) 【19章】

(9a) は助詞「で」にあたる形式の子音 дж (=dʒ) の一部のみが上付文字になっており、ここに ь が隠れているとは思われない。無声化したウの母音を補って

発音されるとも、あるいは後続に母音も存在していないため *soid-zem* と割って発音されるとも考えにくいためである。また、仮に発音注記のための *ъ* の省略であれば、清書本に「\*дѣж<sup>8)</sup>」という表記が1例くらいあってもよさそうである。しかし、джの例は多数存する(481例)が、そのような表記は本資料中には見られない<sup>9)</sup>。また、(9b)の上付文字は促音相当であり、これも一見 *ъ* の省略とは考えにくいように見える。このような *ъ* の省略に当てはまらないように見えるものが、本稿が最も注視したい例である。

以下、これらの例を含めた上付文字を、語末・形態素末の場合と、形態素内部に見られる場合とに分けて考察を行う。

#### 4. 上付文字の機能

##### 4.1. 語末及び形態素末

語末及び形態素末の上付文字には次のような例が見える<sup>10)</sup>。

- |        |                  |                                 |
|--------|------------------|---------------------------------|
| (10) a | дзу\р/           | (dzu\r/ : 出る)【2章】               |
| b      | ю\м/             | (jo\m/ : 読む)【2章】                |
| c      | танурко\t/       | (tanurko\t/ : 尋ねること)【3章】        |
| d      | шишо\n/          | (ʃiʃon : 師匠の)【5章】               |
| e      | нара\v/ко\t/кара | (nara\v/ko\t/kara : 習う事から)【11章】 |
| f      | ката\к/но        | (kata\k/no : 敵の)【16章】           |

この環境の上付文字は、多くが *ъ* の省略と言えそうである。語末・形態素末の上付文字394例と、対応する清書本の例とを比較してみると良く分かる。草稿本394例中28例は清書本では別の表現に置き換わっているため除外すると、366例残る。この内51%以上を占める188例は、対応する清書本で硬音記号が付されている<sup>11)</sup>。366例の内、69例は草稿本と同じく上付になっているため、これらを除外するとその割合はさらに高くなる。清書本との比較から、語末・形態素末の上付文字の場合は、(6)に挙げた先行研究が述べるように、大半が *ъ* の省略と考えられる<sup>12)</sup>。

表1 草稿本上付文字に対応する清書本の表記

対応する清書本の表記	用例数
上付文字	69例
子音+硬音記号	188例
非上付・非硬音記号	109例
合計	366例
別の表現	28例
総計	394例

語末の **ɸ** を省略し、文字を上付にする表記方法は、18世紀ロシアの写本ではよく見られるものであったようで、グレーニング (1730) に次の記述がある<sup>13)</sup>。

- (II) **ɸ** が子音文字で終るすべての語の終りに同じように置かれるのは、結局慣用によるものであり、語の発音にいかなる相違ももたらさないのであるから、いかなる根拠もない。写本においても同様に、そのような場合にはきわめてしばしば除かれて、ただ子音字が上方に書かれるだけである。(グレーニング (1730) (山田 (1991) による))

この記述からも、語末及び形態素末の上付文字は、**ɸ** の省略によるものであることが確認される。なおグレーニングはロシア語の表記にあたり、**ɸ** に発音の相違がないとするが、日本語表記にあたっては、分離機能と、ウの音色を子音に付加するという機能を持っていたと言われる (= (7))。したがって、語末・形態素末の上付文字もまた、ウの音色<sup>14)</sup>の付加と分離機能を持つものと思われる。

## 4.2. 語頭・語中、撥音・促音相当

### 4.2.1. 無声化を表示する上付文字

次に語頭 (形態素の頭) 及び語中の上付文字を見てみよう。次のようなものである。

## (12) 語頭 (形態素の頭)

- a \m/маецукъ (\m/maetsuk' : 生まれつき) 【2章】  
 b яма\m/маво (jama\m/mawo : 山馬を) 【16章】  
 c жонандо\d/же (jonando\d/ze : 状などで) 【10章】

## (13) 語中

- a та\k/се (ta\k/se : たくさん) 【13章】  
 b ката\ш/кеношче (kata\ʃ/kenoʃʃe : かたじけのうして) 【11章】

また、撥音、促音相当の箇所にも見られる。

## (14) 促音相当

- a та\k/ка (ta\k/ka : 高か) 【9章】  
 b а\t/та (a\t/ta : 有った) 【14章】

## (15) 撥音相当

- a ашна\n/до (aʃna\n/do : 足なんど) 【1章】  
 b нѣ\n/горо (ně\n/goro : 懇ろ) 【14章】

本来、撥音や促音は形態素境界に生じるものである。(14b)の「有った」の「っ」は「有り」の語幹と過去を表す「た」が結合した形態素境界に生じる(/ar+ta⇒/atta/)。したがって、この場合も本来的には形態素末として扱うべきところであろうが、4.2.2. で述べるように、表記上の問題と捉えられるため、ここで扱う。また、撥音のうちいくつかもここで扱う。たとえば、複数を表す「ナンド (=等)」は、本来「なにと」という語構成である。したがって、撥音の現れる場所は形態素末であり、通時的には母音の脱落と言えるが、2つの形態素から成るという意識が既になく思われる例が見られる。

- (16) эндівіанандото (эндівіанандото : эндівіа (キクヂシヤ) なんどと) 【清書本 3章】

「ナンド」は元々助詞「と」を含んでいるため、後接する「と」は不要なはずであるが、すでに一語化しているために「と」が後接する例が見られるものと思われる。したがって、共時態としては「ナンド」は1つの形態素であると考えられる<sup>15)</sup>。

さて、形態素内部の例のうち、無声子音が上付文字になっているものが存するが、これらは母音の無声化の反映である<sup>16)</sup>。本資料では母音の無声化が観察されるが、その現象が生じるのは、江口(2006)によれば以下のような条件であるという。

- (17) a 無声子音+狭母音 i/u+無声子音+a/e/o  
 b 無声子音+狭母音 i/u+有声子音(ただし、アクセントのない場合のみ)

次の(18)はいずれも上付になっている無声子音の後に、本来的に狭母音が想定されるものである。

- (18) a та\к/се (ta\k/se: たくさん)【13章】(再掲)  
 b ката\ш/кеношче (kata\ʃ/kenoʃʃe: かたじけのうして)【11章】  
 (再掲)  
 c га\к/шань (ga\k/ʃan·: 学者の)【16章】

上付文字の見られる(18)の環境は、(17)の無声化の条件に合致するため、これらは無声化を起こしたところに ь でウの音色を添えるものの省略と考えられる。

#### 4.2.2. 18世紀のロシア語正書法から見た上付文字

無声化を表す上付文字の例を除くと促音相当(\т/т, \ш/ш, \ч/чなど)、撥音相当、形態素内部の\д/ж, \м/мの例が残る。まず、同じ子音文字が連続する促音相当と\м/мの場合を見てみよう。グレーニング(1730)の正書法についての章には、ロシア語の音節を如何に分けるかについて次の記述がある。

- (19) §83 一つの子音文字が二つの母音文字の間に立つ時には、発音そのものが明らかに示しているように、これを後の音節に結びつけるべきであって、前の音節に残すべきではない。

従って、例えば указъ という語は、ука-зь ではなく、у-казъ と、отець ではなく о-тець などと綴られる。それ故このような語が行に分けられるときには、この規則を守るべきである。

§84 しかし一つの語において、たまたま同じ子音文字が二つの母音の間に立つならば、最初の子音文字は前の音節に、また後のものは後の音節に属する。例えば Икон-никъ, Закон-никъ, Рос-сія などである。(グレーニング (1730) (山田 (1991) による))

これによれば、二つの同じ子音文字が並んで書かれる場合 (例えば тт のように)、一つ目の子音文字は前の母音を中心とした音節に属し、後の子音文字は後ろの母音を中心とする音節に属するものであるという。そして、次の(20)の記述に見られるように、ある文字が、それぞれ別の音節に属することを示すのに、本来、分離記号としての硬音記号が用いられるはずであるが、その省略として上付文字が用いられるという<sup>17)</sup>。

- (20) すなわち前置詞 подъ と動詞 емлю によって綴られる подъемлю 〈私は持ち上げる〉という語は、中央の д の文字のそばに通常 ъ という記号が置かれるが、これは発音において д が母音文字 о に属するものであって、母音 e に属するのではないこと、またこの語が под-емлю であって по-землю と発音されるのではないことを、示している。(中略) 写本においてはこの場合には、子音文字はしばしば記号 ъ を付加することなく、上部に用いられる。(グレーニング (1730) (山田 (1991) による))

これらの記述を総合して考えると次のように捉えることができる。すなわち a \t/ta を例にとると、\t/までが前の音節に属しており、それを示すために、正書法上、\t/の後ろに硬音記号が存在するはずであるが、それが省略され、

そのために子音文字が上付になっているというわけである。このように、同じ2つの子音文字が並列する際に上付になっているのはロシア語正書法における音節の捉え方、そしてその音節の綴り方に起因するものであると考えられる。

次に、\d/ж について見てみたい。この場合は、同じ子音文字ではなく異なる子音文字の連続である。

- (2) a жонандо\d/же (zonando\d/ze: 状などで) 【10章】(再掲)  
 b кака\d/жа\t/та (kaka\d/za\t/ta: 書かちゃった) 【10章】  
 c дошко\d/жаи (doško\d/zai: どしこ(=どれほど)であれ) 【2章】

これが、発音上の分離を表す硬音記号の省略であるとする、格助詞「で」や過去否定の「ちゃった」、「～であれ」にあたる子音が、dとzとに分けて発音されることになる。しかしながら、これらはそのように割って発音するための注記ではなさそうである。どうも外国語をキリル文字で表記する際の、ロシア語正書法に則ったものであるらしい。先に見たグレーニングのロシア語文法によると、以下のような記述が見られる。

- (2) しかしこれ以外に指摘できるのは、例えば лм, лн, нш などのように、ロシア語においていかなる語にも用いられないような音節の分け方に、子音文字を融合すべきではなく、алма-зный ではなく ал-ма-зный、および по-лный ではなく пол-ный、я-нтарь ではなく ян-тарь のように綴るべきだということである。(グレーニング (1730) (山田 (1991) による))

дж という文字列は、現代ロシア語でも外来語を表記する際に「джаз (ジャズ)」「джинсы (ジーンズ)」のように用いられるのみであってロシア語にはおそらく存在しなかったものと思われる。この文字列は、駒走 (2004) が「тとчのような2つの子音文字がロシア語に存在しなかったために、「д」と、「д」に「ж」を後接させた「дж」によって表記し分けた記録者の工夫なのではなかろうか<sup>18)</sup>」と指摘する通り、日本語表記のために創出されたものであろう。した

がって、ここで *д* の文字のみが上付になっているのは、外国語としての扱いを受けて(23)のように捉えられたということになる（区切りを - で示す）。

- (23) a жонандо\*д*/же (zonando\*д*/ze : 状などで) 【10章】  
 ⇒ жонандод-же (zonandod-ze) 【10章】  
 b кака\*д*/жа\*т*/та (kaka\*д*/za\*т*/ta : 書かちゃった) 【10章】  
 ⇒ какад-жат-та (kakad-zat-ta)  
 c дошко\*д*/жаи (doʃko\*д*/zai : どしこ (=どれほど) であれ) 【2章】  
 ⇒ дошкод-жаи (doʃkod-zai)

しかし、これはグレーニング自身が「…のように綴るべきだ」と記しているように、実際の発音上というよりも、外国語の表記にあたって、正書法上の綴り方の問題で *д* と *ж* の子音の連続を *d-ʒ* と分けて捉えていたものと思われる。そしてそれを綴る際に、分離記号として *ъ* が機能するはずであるが、これはしばしば省略されて文字が上付になる (=20)。これが \*д*/ж という表記<sup>19)</sup>を生みだしているものと思われる<sup>20)</sup>。

最後に形態素内部で撥音相当に上付文字を持つものを見てみたい。これは、友人を意味する「懇ろ」と、複数を表す「～なんど (=等)」が該当する<sup>21)</sup>。

- (24) a нѣ\*н*/горо (něngoro : 懇ろ) 【14章】  
 b варабѣна\*н*/до (waraběnano : 童なんど) 【6章】

この場合も \*д*/ж と同様におそらく正書法上の音節の分離を表示しているのではないかと思われる。\*н*/г の文字列が用いられるのは外国語の表記に多く見られるためである<sup>22)</sup>。他方、\*н*/д の場合ははっきりしたことが言えない。やや外国語の表記に用いられることが多いようにも思われるが、現時点では判断を保留する<sup>23)</sup>。

このように見ていくと、形態素内部の上付文字もまた、多くは *ъ* の省略であることがわかる。そしてその内実は、一部の無声化を反映した例と、正書法に

よってなされたものが存在するということになりそうである<sup>24)</sup>。

表2. 上付文字の機能

上付文字の現れる環境		何を示すか	どんな機能を持つか
語末・形態素末	後続音なし or 後続音が子音	ɤ の省略	母音の脱落を表示
	後続音が母音		後続母音との分離
形態素内部	後続が子音 + 非狭母音		母音の無声化を表示
	同音連続 (促音相当、mm)		正書法による音節の分離を表示
	形態素内部 (дж)	正書法 (特に外国語表記) による音節の分離を表示	
	撥音相当 (нг, нд)	ɤ の省略?	正書法による音節の分離を表示か?

## 5. おわりに

ここまでロシア資料に見られる上付文字について述べてきた。今回の観察から、上付文字は語末・形態素末、形態素内部に限らずおそらくほぼ全ての例が ɤ の省略を示しているようである。

語末形態素末の上付文字は、先行研究の指摘するとおり、ɤ の省略であって、母音の脱落を示すことが多い。こちらは発音を示すための表記である。一方、形態素内部に位置する上付文字は、少数の無声化を反映するものを除くと、基本的にはロシア語正書法による子音と子音とを異なる音節に分けるための ɤ を省略したものと思われる。こちらは発音そのものというより表記上の規則によるものである。

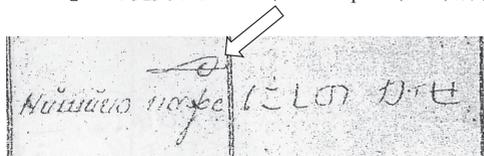
江口 (2006) は、ロシア資料に見える母音の無声化の反映や、正書法に従う表記方法などから、本資料がロシア語表記に敏感な者の手になると述べている。本稿で述べた上付文字もまた、ロシア語正書法に則るところが多く、おそらくそうした書き手による資料であることを示すものと考えられる。

## 注

- 1) 草稿本と以下で述べる清書本に関する概要は村山(1965)及び江口(2006)を参照されたい。対応するロシア語文の解釈は江口(2009)に拠った。また、本資料の日本語訳はゴンザがどの程度関わって訳をしたのかははっきりしない。現段階では、ゴンザがインフォーマントとして日本語訳に関わった可能性が高いと考えているが、本稿ではこの日本語訳を便宜上「ゴンザ訳」と呼んでおく。
- 2) io の上部に線を伴った文字は、/jo/ 相当の音を表す。/jo/ 相当の文字がロシア語になかったための措置のようである。
- 3) 清書本からの引用はその旨示した。特に断りのない例は全て草稿本による。
- 4) ロシア語ではいくつかの文字を省略する際に語の上部に弧線を引き、文字を上付にすることがある。(4)の例はこの省略に当たると思われる。なお、こうした表記方法はヨーロッパの他言語でも見られる。
- 5) 草稿本につき2回、清書本につき1回の調査を行った。手書きの写本で読みにくい箇所もあり、またところによりかなり小さい文字で書かれているため、若干の漏れの可能性は否めない。しかし、大勢に影響はないものとする。なお、一語につき2カ所上付文字が見られる場合(例えば(1)の例)、2例と数えた。
- 6) 稀に2文字上付になっていることがある(530例中12例)。その内、9例が нь (нь) に集中するが、理由は未詳である。
- 7) また、偶発的に生じたものであれば、文字種に偏りが無いはずであるが、行上には書かれるのは基本的に子音文字に限られ、母音が上付になっている例は1例も見られない。この偏りも偶発的な表記ではないことの傍証となろう。
- 8) 存在しない語形や表記を表す際に、\*を附して示す。
- 9) 他のロシア資料(『世界図絵』『日本語会話入門』)を調査)にも存在しない。
- 10) 促音相当(例「あった」)や撥音のうちいくらか(例「足なんど」)は、形態素境界に生じるものであり本来ここで扱うべきものであるが、これについては後述する。
- 11) 対応する清書本で「ь(軟音記号)」が付されていることもある。(10f)はカタキと解釈できるため、軟音記号の省略であろう。
- 12) 残りの109例は、清書本では上付にもなっておらず、ьも付されていない。子音のみの表記である。
- 13) 下線は引用者による。引用の下線は、以下の場合も同様。
- 14) 上付文字が軟音記号に対応することもあるため、あるいはイの音色も付加していたか。
- 15) なお、中央語でも語源意識が薄れて助詞「と」が付接するようになった例が見られ、中世以降は「と」がつく方が一般的になったという(『日本国語大辞典』「なんど」の語誌参照)。
- 16) この点、すでに江口(2006)に文字が上部に付されているため無声化を表すという旨の

指摘があり、ウの音色を添える硬音記号の代わりに上付文字が使用されていることが了解されているものと思われる。

- 17) ただし、20)の記述では子音文字と母音文字の分離が例として挙げられている。
- 18) ここでは口蓋化した日本語の音を表すために、т (=t) に対して ч (=ç) というロシア語の子音文字による対立を用いていたこと、そして д (=d) には対立する口蓋化音を表す子音文字がロシア語に存在しなかったために дж という表記を創り出したことが指摘されている。
- 19) なお、このような д と ж を分離する表記は、'-' (ハイフン)' によってもなされる。冒頭に挙げた画像 (=1)) では、行をまたいで表記される д と ж の間に '-' が付されている。こうした表記方法は日本語母語話者的な音節の分け方ではなさそうである。
- 20) \ч/ч, \ш/ш は、同じ子音文字の連続であることから \т/т の場合と同様に促音相当として扱った (ただし \т/т に比して用例はかなり少ない) が、\ч/ч, \ш/ш、いずれもロシア語にはないと思われる文字列であるため (東京外国語大学「コーパスに基づく言語学教育研究拠点グローバル COE プログラム」による「ロシア語辞書 (<http://cblle.tufs.ac.jp/dic/ru/index.php>)」にて検索したが、1件もヒットしなかった。最終閲覧日2016年11月14日)、\д/ж と同じく外国語と同じ扱いを受けて上付文字になっている可能性もある。しかし、いずれにせよ、前の子音が前の音節に、後ろの子音が後ろの音節に属することを表すための ъ の省略であることに変わりはない。
- 21) 「懇ろ」は語源的に「ね+もころ」か「ね+も+ころ」かと言われる (『日本国語大辞典』語誌参照)。いずれにせよ「も」の母音が脱落したものと思われるが、ロシア資料では本来マ行音の語の母音が脱落すると м (=m) 表記、ナ行音の語の母音が脱落すると н (=n) 表記になる傾向があるという (江口 (2006))。しかしこの語の場合、語源的には「も」の母音が脱落しているはずであるが、н (=n) 表記になっている。語源意識はなく、一つの形態素になっていると捉えておく。
- 22) 注20)の東京外国語大学「ロシア語辞書」にて検索。最終閲覧日2016年11月14日
- 23) \н/г と同様に音節分離の表示であろうか。この点、ロシア語学・ロシア語史に暗いため先達にご教示頂きたい。
- 24) なお、この上付文字は、同じく東北の漂流民が関係するアンドレイ・タタリノフの『レクシコン』にも見受けられる (О.П.Петрова (1962) 所収の影印を使用)。



нийшино ка\д/жеにしのかぜ

このように、別種の資料においても上付文字が見られることから、ロシアにおいて特異なものではなく、一般に行われていたロシア語正書法によるものであることの傍証となろう。

#### 参考文献

- 江口泰生 (2006) 『ロシア資料による日本語研究』和泉書院
- 江口泰生 (2009) 『古辞書・ロシア資料による日本語形態音韻の研究』科学研究費成果報告書
- 駒走昭二 (2004) 「『露日単語集』に基づく18世紀薩隅方言のエ列音」『国語学』217
- 千葉軒士 (2013) 「キリシタン・ローマ字文献の撥音表記について」『訓点語と訓点資料』131
- 村山七郎 (1965) 『漂流民の言語』吉川弘文館
- 山田巖 (1991) 『ロシア中世文法史』名古屋大学出版会
- O.П.Петрова, *Лексикон русско-японский*, Москва, 1962

#### 参考 URL

東京外国語大学「コーパスに基づく言語学教育研究拠点グローバル COE プログラム」による「ロシア語辞書」<http://cblle.tufs.ac.jp/dic/ru/index.php>

付記：本稿は外国資料研究会（2016年8月於愛知県立大学）にて発表した内容を増補、修正したものである。調査に際して、愛知県立大学若手研究の助成を受けた。